

2017.11 no.78

aaco

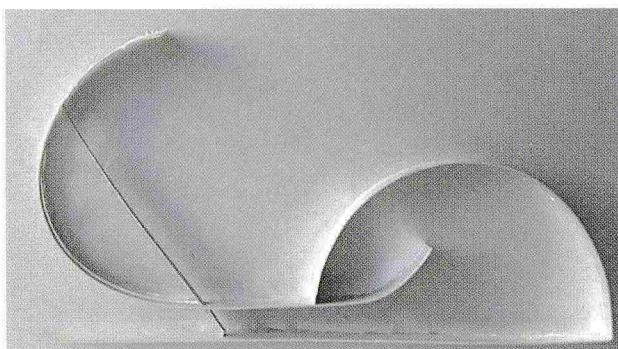
一般社団法人 日本建築美術工芸協会



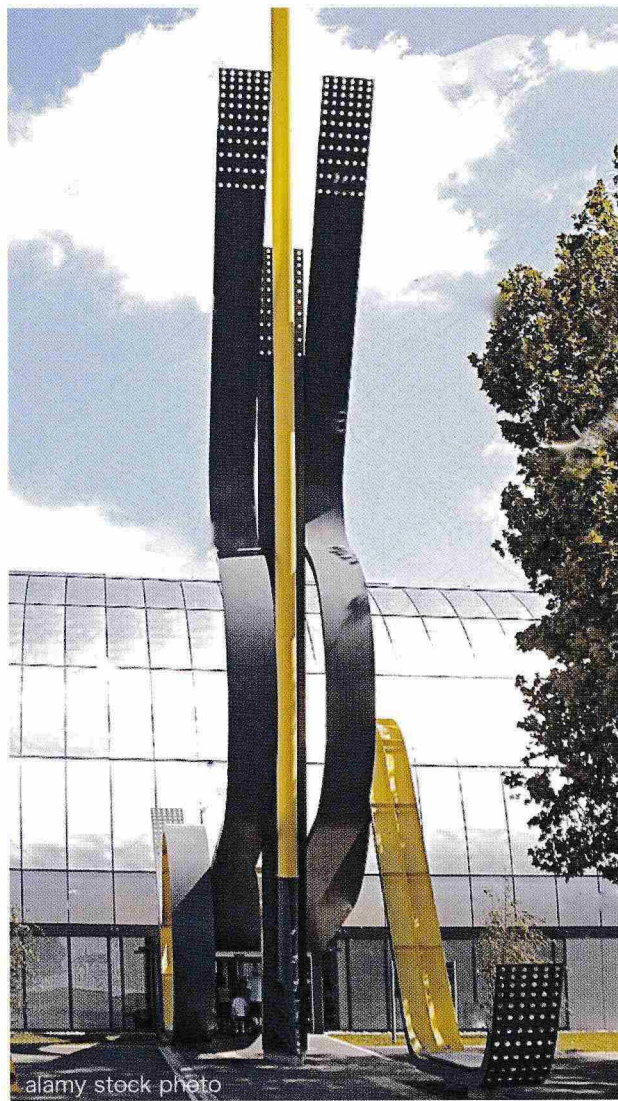
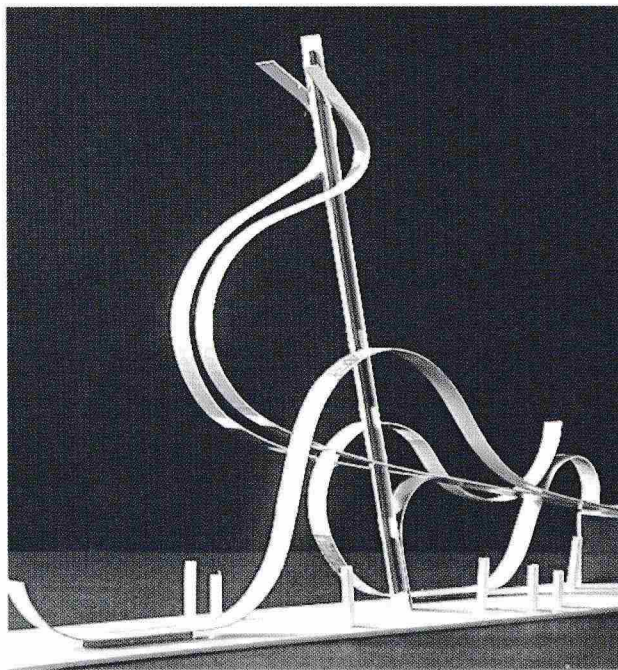
SKY DANCE 2003 Kisa KAWAKAMI /川上喜三郎 Royal Air Force Museum, London

SKY DANCE 2003 王立英国空軍博物館 100年記念モニュメント LONDON

ライト兄弟の初飛行から100年の2003年3月。英米両国で同時に100周年記念式典が行われた。此処ロンドンでは王立英国空軍の博物館が新規開館。式典当日、主賓フィリップ殿下が「このモニュメント作品は日本で制作されたのですか?」のお言葉に「ヨークシャーで作りました。工場で組み立て3分割して現場で溶接、仕事には満足です」と御答えしました。この博物館のモニュメントのデザインコンペが行われたのは2000年。指名された6人のうち私以外は全て英国人の建築家、彫刻家、デザイナー。1時間の個人面接の数日後、私が選ばれた事を電話で知った。博物館設計建築事務所とのコラボ、極めてイングリッシュの英国空軍理事会との打ち合わせは新鮮だった。一枚の長方形鉄板シート材に切り込みを入れ5枚の幅1m弱の長尺を夫々自在に回転させながら飛行の軌跡、瞬発力等の表現を目指すと共に高さ25mの構造のバランスを試みる。此のモニュメントは博物館の導入シンボルと共に玄関の庇である。アクセスの両側は長尺メタルがベンチに変わる。「用と美」を併せ持つ造形でありたい。25mH x 5mW



指名コンペ/インタビューで紹介した断面イニシアルモデル、ヴォールト屋根の建築、博物館と合体するモニュメントの造型は?



川上喜三郎 王立英国建築家協会建築家 造形作家 AACAA 会員

早稲田大学建築学科,同大学院修了。ジュエリー、プロダクトデザインから建築、アーバンデザイン迄をモットーにロンドンを拠点、英米で活動。ロンドン市カムデン区役所集合住宅建築設計部10年を経てAAスクール教授(1982~94)。複数のロンドン大学建築学科卒業計画の外部試験官(1989~2004)、新国立劇場デザインアドバイザー、TAK建築研究所との協働プロポーザルコンペで3連続最優秀賞;郡山市立美術館、東京都現代美術館、三鷹文化センター(1989~90)。日産スタジアム炬火台コンペ最優秀案設置(1998)、京都迎賓館あかり計画。広域計画では三菱地設計丸の内再開発計画デザインアドバイザー(1998~2006);屋内パブリックアート設置、日建設計大阪と協働;北梅田開発コンセプト国際コンペ最優秀賞(2004)、グランフロント大阪日建設計アドバイザー(2008~13)、エストニア、タリン市音楽舞踏祭の舞台装置(2010)など。

CONTENTS

■時代の華一輪

「パリ・シナジー展」

平山健雄 4

建築家たちのスケッチ展

山本俊介 5



▶▶ 4

■会員活動レポート

街に飛び出す作品展に参加して

鈴木法明 6

ベルギー・海外での初個展

神 まさこ 7

色彩はいつも、魅了する。

松田静心 8

ガラスに向き合い どこまでも美しいガラスの可能性を

野口真里 9

アーティストのコラボレーションと展示空間について

吉田 実 10

関係のひろがり

山下博満 11



▶▶ 5

■展覧会委員会だより

第3回街に飛び出す作品展：設置報告

安河内敦子 12



▶▶ 7

■調査研究委員会だより

展覧会から 第81回新制作展を通して

二井 進 15



▶▶ 9

■事務局だより

16



▶▶ 11

「パリ・シナジー展」

ステンドグラス作家
光ステンド工房代表
日本建築美術工芸協会理事
展覧会委員会委員長

平山健雄



元、現 aaca 会員を含む4人のそれぞれ違う素材を扱うアーティストが、フランス・パリのギャラリーで展覧会を開催した。今年で3回目になる。40年前、学生として3年間暮らしていた頃のまだベル・エポックの残り香が漂っていた遠い記憶が、パリの様々な石積の街並への視線に甦ってくる。

パリに住んでいたのだからさぞかし美味しいレストランやワインを知っているだろうと思われているが、星付きのレストランは一度も入ったことは無かった。ワインはパリに行った当初、1本30円程度の安物を毎日2本ずつ飲んでいたくらいである（この手のワインは肝臓を冒されるから気を付けて当時では50円程度の物にした方が良かったのだが）。朝8時30分から17時30分までの授業、遅刻すると学校の門が閉まって入れない。他にフレスコ、テンペラ、モザイク、タペストリー、壁面構成、エコール・デ・ボザールではステンドグラスの学問的歴史の授業を受け、図書館、美術館、教会巡りと遊ぶ時間は皆無。学費は国立なので免除が普通。帰国してから1年に1度は材料買い付けや資料探し、学生達のツアー引率などでパリに寄ることが多いが、懐かしく情緒的な思い出はほとんど無く「苦しい勉強の時間を過ごした日々」が朝のパンとカフェオレの香りから甦ってくるのが常である。

シャルリー・エブドの事件があったカフェにほど近い「ギャラリー・サテリット」では、「LE GENIE EN LIBERTE」(自由の守護神)とのメインテーマで、パリ11区内にあるギャラリーでの展覧会、アニメーション、インスタレーション、アーティストのアトリエ、商店、文化拠点など59ヶ所の内の一つとして「第3回シナジー展」が開催された(10月15日～25日)。パリでは、区が20区あり、それぞれの区で独自に様々な文化的な催物があり、補助金も出る。フランスでの展覧会はオープニングその日に商談が決まることが多く、評論家、美術館関係者、知人な

どワインを飲みながら時にはフランス人特有の議論になったり、遅くまでわいわいとやっている。近年郵送のDM通知はあまり行なわれずインターネットでの周知がほとんどで、スマートフォン片手に画廊巡りをしている人達も多い。今回は各参加施設には看板が配られ、参加表明していることを明示する形となっている。会期中は夕方から画廊に居て来場者の対応をすることになるのだが、7時過ぎにもなるのに足の長い夕陽を眺めながらプラスチックのコップでワインを飲むひとは、イール・ド・フランスの美しき光に身を委ねる貴重な時間である。

フランス人は多少の違いはあるにせよ、今までに経験したことの無い初めて見る「もの」に新鮮さを感じ、そして価値を与えることが得意なようだ。二番煎じを一番嫌う。常に今までと違う表現を追求することを好む。エキセントリックやサンパティックが大好きなのである。そこにこそ芸術の価値が存在することを知っているかの様に異端をこのむ。そして底に流れているまさに通奏低音を感じ取り、音階の調べを調整しメロディーを奏でてゆく。画廊が休みの日にジヴェルニーのモネの庭園に初めて行って見た。オランジュリー美術館のモネの結論とも云える睡蓮の「大作」に秘密は無い。「見えたまま」を描いているだけであることがわかる。実体の在る草、木、花、水、実体を写す虚像の空と雲と花と光。その広がりをも同一画面に遠近法を使わずに光の情景として描いている。困難な空間構成の中に葛飾北斎のジャポニスム的構成が読みとれる。日本の浮世絵の膨大なコレクションをモネの家で目の当たりにして、当時巷では奇人・変人とも云われていた北斎に対しての眼力に改めて脱帽、感謝。

展覧会参加者：浜崎ベア(ブリスアート)、川北英(建築家、絵画)、大平奨(絵画)、平山健雄(ガラス)



展覧会の会場のような



フランス人来客への対応も楽しい



ジヴェルニーにあるモネの庭園

建築家たちのスケッチ展

山本デザイン研究室
日本建築美術工芸協会会員
建築家たちのスケッチ展代表

山本俊介



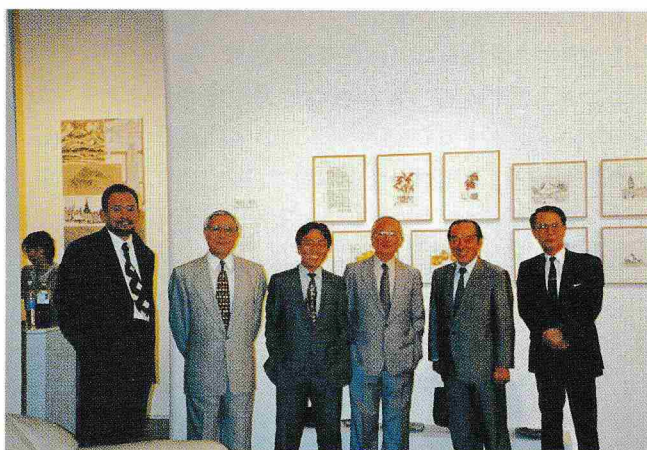
スカイドア時代

「スカイドア」という画廊が青山にあった。

外部階段を地下に降りていくと、打放しコンクリートで天井が高く、建築家好みの雰囲気であった。

オーナーのT氏は、ここでキュレーターを雇い、新進の現代アーティストを見だし育てる画商をめざしていた。当時建設業協会（BCS）の設計部会の部会長をしていた私に「設計者の方々は現代美術にご興味はありませんか」と誘われ、著名なアーティストの新人時代の作品を次々に紹介され、刺激を受けたことがあった。T氏から思いもかけぬ提案が示され、彼の画廊が夏季休暇に入る7月の最後の1週間を「山本さんのグループに無償で提供しますから展覧会をやりませんか」と言うのである。そこで大手企業の設計部門の長で絵が好きな人達に声をかけ、第一回の「建築家たちのスケッチ展」が会員数五名で発足したのが1995年であった。オープニングの日、地階までの階段は祝花で埋めつくされ華やかであったのを思い出す。スカイドア時代は2002年までの8年間である。

会員は5名から始まり、最後の年に大学教授を加え8名になっていた。



「第2回建築家たちのスケッチ展」1996・7・22～27
左から T氏、中島昌信、舟橋 巖、森田重人、山本俊介、成瀬嘉一

建築会館ギャラリー時代

建築会館の1階ギャラリーが整備された2003年に「第9回建築家たちのスケッチ展」が最初の利用者として展覧会を開催できたのは、とても幸運な事であった。ギャラリーは、「適当な広さ、十分な天井の高さ、かつ大きなガラス壁面を通して中庭に接する」という優れた環境であり、毎年「建築家たちのスケッチ展」を開催するのに、これ以上の場所は「無い」と思っている。

2003年の出品者は7名で、2011年まで変わっていない。運営は輪番制で担当し、展示スペースの位置は毎年1駒、移動することになっている。出品者それぞれのメインテーマは自由だが、絵の大きさ、額装などを統一し、会場全体に気持ち良いと感じられる展示効果を狙っている。

1960年に創設された「BCS賞」は半世紀以上にわたって、国内で建築された優秀な建築作品が、毎年10数点選ばれ、表彰されることで有名だ。「建築家たちのスケッチ展」の会員の殆んどは、「BCS賞」の選考委員の大役を勤めたベテランである。

1995年「建築家たちのスケッチ展」発足の当時5名の会員の中、中島昌信、舟橋 巖、森田重人の三人の名前が消え、残るは成瀬嘉一、山本俊介のみとなった。

2015年、会の将来について検討し、新入会員の受け入れと、会員の日本建築美術工芸協会への入会を決めた。その後同協会の主催として「建築家たちのスケッチ展」が開催され、その継続についても日本建築学会との関係を確固なものとし、「建築家たちのスケッチ展」の発展を目指している。

「第23回建築家たちのスケッチ展」出展者

秋元和雄、阿部利裕、猪野 忍、井上武司、
木村健一、成瀬嘉一、成瀬輝一、村松映一、
山本俊介、
9名



「第23回建築家たちのスケッチ展」2017・9・1～8
前列 秋元和雄、山本俊介、猪野 忍
後列 阿部利裕、井上武司、村松映一、成瀬嘉一

会員活動レポート

街に飛び出す作品展に参加して

彫刻家
日本建築美術工芸協会会員

鈴木法明



「第1回街に飛び出す作品展」は、2014年10月に建築会館1階とイベント広場で作品展及び作品選考会が行われました。私の作品「ようこそ21世紀へ・種を播く人」も神奈川計画の選考候補作品に選出していただき、スターツCAM（株）直井秀幸社長より推薦状と副賞を授与されました。その後イベント広場に於いてオープニングパーティが行われ、スターツCAM（株）社員の方のご紹介によりオーナーの佐伯様ご夫妻に作品の制作方法や意図、材質等について少しお話をしました。

それから数か月が過ぎた頃、安河内委員から現場見学及び打ち合わせの連絡がありオーナー、スターツCAM（株）現場担当の方、選考委員、作家の方達と一緒に状況視察し、設置場所、取り付け方法、搬入等について打ち合わせを行い、その結果設置の日取りが6月頃になるとの事でした。後日スターツCAM（株）の村上様、木下様が私の仕事場まで設置する作品を見に来て下さり、実物は大きく迫力のある作品だと安堵された様子でした。その後も安河内委員とオーナーご夫妻が作品を見に来て下さいました。ご夫妻は自動車でお見えになったので帰路、川口市朝日環境センターのバス停の前に設置されているステンレス製の兄妹と犬の群像「お兄ちゃんと一緒に」を、またそこから車で15分程の所にある東京都足立区都市農業公園、ここは国土交通省より関東の富士見百景に選定されている所で、眼下には荒川が流れ遠方には富士山が見える荒川のスーパー堤防に設置されているチタンとステンレスによる兄妹の像「お兄ちゃんと一緒に」を見て頂きました。

6月に入り建物も外構工事も完成し設置が近づくにつれ、一年間の展示になるので作品がこの場所に馴染めるか、地域の皆様に親しく受け入れてもらえるのかなど一寸不安でした。搬入設置には私もユニックの資格を取得していますので、ユニック車をレンタルして現場取り付けを無事に終了す

ることが出来ました。

それから一年が経ちオーナーより電話がありました。もしも作品を譲る気持ちがなければあの広いスペースの展示場所を私に自由に使用しても良いからと言って下さった言葉には驚くとともに設置して下さいことに気がつき、喜んで譲渡させて頂く事に致しました。後日、売買契約を済ませ無事に譲渡完了で今日に至ります。

「第2回街に飛び出す作品展」も2015年10月に建築会館1階とイベント広場に於いて昨年と同様に開催されました。私の作品はチタン材による鍛金、鍛造、溶接等の技法により制作しました題名「雨あがる」を出品。世田谷区太子堂計画に選考作品され、スターツCAM（株）直井秀幸社長より推薦状と副賞を授与して頂きました。展示会場では（株）太子堂久保社長とお話しでき、作品の意図等をご説明しました。後日の現場打ち合わせにはスターツCAM（株）社員の方々、aaca村松委員、安河内委員の立ち会いのもと設置の段取りをつけました。その後2ヶ月程経って外構工事もほぼ完成した状況に於いて、作品の設置も無事に終了致しました。それから1年が経ちまして大変有難いことですが作品を購入して頂きました。

私の好きな相田みつを先生の詩に「そのときの出逢いが人生を根底からかえることがあるよき出逢いを」があります。第1回展、第2回展、第3回展に大変お世話になりました。オーナー、スターツCAM（株）の皆様、aacaの皆様、作家の皆様との「よき出逢いを」させて頂いたこと、皆様がお心にかけて下さいましたこと、この上ない感激です。重ねて厚く御礼申し上げます。これからも日々精進して制作する所存でございますので、ご指導ご批判をお願いいたします。ありがとうございました。



ようこそ21世紀へ 種播く人



お兄ちゃんと一緒に

ベルギー・海外での初個展

美術家
日本建築美術工芸協会会員

神 まさこ



いつかは海外で個展をしたい！しがらみのない外国の地で、私の作品の前で人は足が止まるかどうかを見たい。

漠然と夢見ていたことが、思いもかけず早くも実現することになりました。

それは今年2月、私がお世話になっている山崎輝子先生を含めた作家の方々と、イタリアのミラノ、ベルギーのブリュッセルでのアートフェアに参加した後の事でした。搬出後に現地を自分の足で確かめたいという思いで、2泊延泊したのです。海外で個展をするのには、貸しギャラリーはほとんどないと聞いてはいたものの、ダメもとでここはというギャラリーの扉を叩くことにしたのが始まりでした。現地に詳しい日本人の方（愛芽さん）の道案内で、有名なチョコレート屋さんが並ぶサブロン広場から1分もかからないところにある老舗ギャラリーに向かいました。扉を開け、数段の階段を降りると、奥深いギャラリーの奥に貫禄のある女性オーナーがデスクに座っての無表情のままの対応は、身の引き締まる緊張感が漂っていました。この日の事は、後にこの女性オーナーから「運命の出会い」と言われたのですが、この日が全ての始まりでした。個展をしたい旨を伝え、条件等を訊くと、「1月、7月、8月、一か月間貸しならよい。」翌年を訊いても同じことを話され、オーナーはお留守だということから、あまり条件は良くはないが、全く箸にも棒にもかからないというわけではないと思いました。これをチャンスとするかどうかは、私次第。少しの迷いや不安はありましたが、やってみないとわからないし、個展だから恥をかいても、失敗しても全て私の責任に於いての事とし、条件を飲み、同年の7月にするという契約を結ぶ決心をしたのです。これは勇気がいるという

より、度胸がいりました。この心意気は、5か月足らずの準備期間中、そして展覧会期中、己が己を試し続けました。

さて何故ブリュッセルを選ぶ地としたのかということ、ヨーロッパでの拠点となる地を考え始めた時におへその位置にあると気付いたからです。以前からアートフェアへの出品でヨーロッパに足を運んでいましたが、その度に大きな荷物を運び、売却目的で出品するのに少々疑問を感じ始めたというのが大きな理由でした。ブリュッセルを拠点にすると地面が繋がり、人々が繋がっている筈という予想はまさにその通りだと実感いたしました。一人の方の親戚縁者、知人達は地続きの異国に住みながら交流があるのです。知人が知人を呼び、海外初個展はお陰様で初日73人の来訪者から始まり、沢山の方々のご高覧を頂け、心ある方々と知り合うことができました。度胸試しの緊張感は、契約してから展覧会終了後まで続き、個展終了、搬出後に思わぬ嬉しいお話をギャラリーより頂きました。「次回は私が守るから個展をしない？」お誘いでした。そして、「日本人に貸して本当に良かったわ。」と初対面の方とは別人のように笑顔で接して下さり、次への課題の話も出るようになり、作家として、日本人として冥利に尽きるとはこのことだと実感致しました。

そして何よりも、今回の結果は私一人では到底達することはできなかったです。日本では心より応援して下さいる方々に恵まれ、現地で快く手伝って下さり応援して下さいる方々に恵まれ、そのお陰と心より感謝しております。

今後とも、真摯に制作に励みたいと考えております。どうぞよろしく願い申し上げます。



サブロン通り



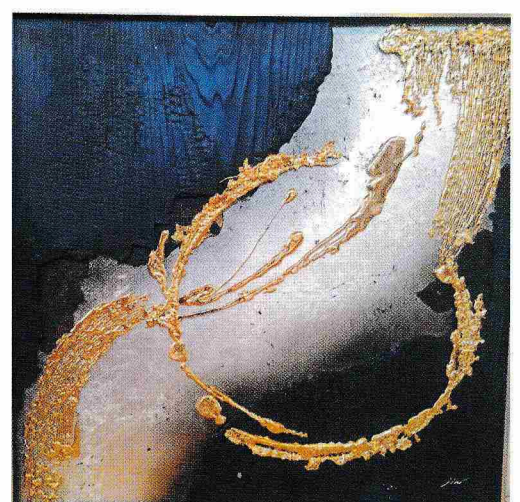
個展会場



ギャラリーオーナー テレーズ・ギヨーム



個展会場



陰陽五行

色彩はいつも、魅了する。

美術家 松田静心
日本建築美術工芸協会会員

今年2017年は、2月の銀座アート・フォー・ソート、4月の浅草ギャラリー・ニュアージュ、6月の鎌倉ギャラリーAKI、9月の銀座ギャラリー58と、無謀にも年間4回の個展をすべて異なるテーマで開催した。

活動拠点のギャラリー58では「みえないもののありか」をメインコンセプトに、フラットな色面だけの抽象作品を発表して10年(10回)目であったため、その開催前に、他の3件の展示をそれぞれ異なる単色をテーマにして、それぞれの色彩の持つ本質と力の探求を試みた。

3色それぞれを掘り下げて今年の前半にクリアすることで、後半の白をより深化したいと考えたのだ。

2月が「Yellow Impulse」(黄)、4月は「Water Sky」(薄青)、6月「GOLD RUSH」(金)、9月「HALCYON DAYS」(白)。この中から、今年4月が初めての開催となった浅草での個展のことを書くことにした。

都営浅草線浅草駅A1出口を地上に出ると、有名な「駒形どぜう」手前のすぐ近く、民家が並ぶ一角。浅草界隈とは思えない4階建ての白い洒落な建物が目に飛び込んでくる。思わず「ここは浅草ホワイト・ハウスだ!」と叫びたくなった。白い外観から1960年に日本で興きた前衛美術運動「ネオ・ダダイズム・オルガナイザーズ」が新大久保辺りの、通称「ホワイト・ハウス」を活動拠点としていた事と重なったのだ。

1階と2階が画廊スペースになっており、陶芸と立体的な作品展示も多いので窓が多く、画廊内は自然光が入り明るい。夜は作品が照明にひと際映えて美しい。

「青山善光寺社殿」や「銀座マロニエゲート」などを手がけられた建築家、向後慶太氏の手による「浅草ホワイト・ハウス」は、内装にはホワイトオーク材を上手く使っており、来廊者の心を解放的にしてくれる。他にも、階段と踊

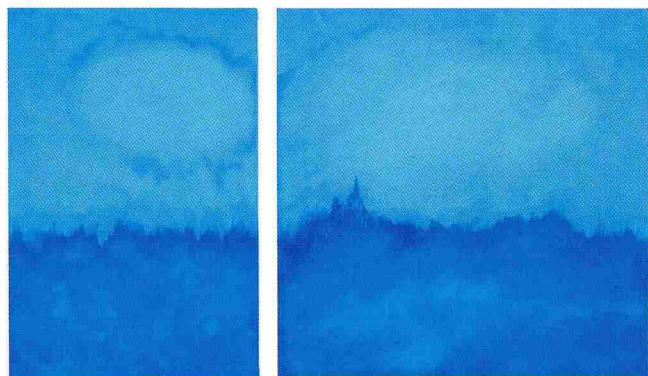
り場、入口上部とパウダールームのランプなど、さりげなくも随所にオーナーご夫妻のこだわりを感じる建物となっている。画廊名のニュアージュはフランス語で雲のこと。なるほど、スカイツリーを眼下に、浅草の空に浮かぶ雲のイメージなのだ。

個展と作品の話に戻ると、それまでの個展でコンセプトに合わせた色をテーマにしてきたので、浅草の個展のコンセプトは「Water Sky」、テーマを薄青(ライトブルー)とした。意図的にイメージを合わせたわけではないが、空と雲のイメージにぴったりであった。

作品制作は、真白いキャンバスに桜島の火山灰を混ぜた水性の黒の絵具でベースを作ることから始まる。桜島の火山灰を使うのは、ある時郷土のものを作品に取り入れたいと考えたからだ。最終的に赤や青、あるいは白にする時でもベースは全て黒から始まる。その上に大まかなイメージを素早く描き、最後に日本画用画材の水干、胡粉などを混ぜた油彩を極薄く溶き、何層も塗り重ねていく。油彩用の溶油は極速乾性のものを使用し、黒の作品では墨も使う。

抽象絵画、特に自分のようなシンプルな作品の制作は深く自己に向き合うことでしか制作できず、簡単に先には進めない。自己と向き合い格闘しながらその先を目指す。見たことのない景色を見たいとも思う。そしてその全てを楽しみたいと思う。最後に、以下の映画に作品を使って頂き、現在DVDで観て頂けるのでご覧頂ければ幸いです。

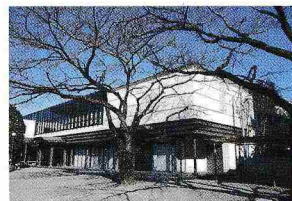
- 「行きずりの街」仲村トオル・小西真奈美 W 主演
(阪本順治監督・2010年東映系全国公開)
 - 「嫌な女」吉田羊・木村佳乃 W 主演
(黒木瞳初監督・2016年松竹系全国公開)
- ギャラリー・ニュアージュ <http://www.g-nuage.co.jp>
ギャラリー58 <http://www.gallery-58.com>



ギャラリー・ニュアージュ展示作品より



ギャラリー・ニュアージュ外観



青山善光寺社殿

ガラスに向き合い どこまでも美しいガラスの可能性を

ガラス造形作家
Atelier Mari-and-Bird 主宰
日本建築美術工芸協会会員
野口真里



誰もがそうかもしれませぬが一纏まりの歳の単位で人生の節目の年があるとしたら、私の場合9のつく歳でしょうか。

まず49歳。2011年 東日本大震災の年。創作活動の意味を問う人生100年の残り半分どう生きるかを真剣に考えざるを得ない年でした。それまで安全こそを旨としてきたはずなのに震災で全ての仕事が失注するという事態、ガラスに対する「割れる、危ない」という先入見を覆せなかったのです。そんな時一つだけ引き合いがありました。商業施設横浜駅東口ポルタリニューアルコンペです。実はこの時私には全く意欲が感じられないでいました。テレビから流れ続ける大津波の映像と、拡大の一途を辿る被災の悲惨な状況に自らの無力を思い知らされ途方に暮れるばかりだったからです。ガラスでどんな提案をすればいいのか、生まれ育った横浜の現場、節電で街の灯りも消え、日本中の人々の心も暗く沈むばかり。実は、26年前に大船渡のさいとう製菓に納めたガラス造形作品も本社屋共々大津波で流されてしまっていました。少しでも励ましになれば当時の竣工写真を祈るようにお送りすると、暫くしてFAXの礼状が流れてきました。

『あなたのガラスのデザインを「かもめの玉子」のパッケージにする予定でしたが、全て流されてしまい今はお菓子の生産さえ儘ならぬ状態。しかし必ず復興の先駆けとなり「かもめの玉子」の生産を再開します。』全てが流されても人の心は流されない、と思いました。そして、横浜も、大震災、大空襲から復興した町であることに改めて思いが至りました。人々の町を愛する気持ちこそが人々の心を上向かせそして町を強くし日本を元気にさせる。私が為すべきことは、横浜の人々が大切にしてきた記憶を心に留め、この町が好きだと思っ貫えるような美しいものを渾身の力で創り出すこと。

横浜には、開港記念会館・税関・県庁、という三つの塔があります。この三塔は震災や空襲を乗り越えた横浜の歴史文化を象徴する建物、かつて海外から訪れた船乗りが、日本の港に着いて初めに目にし、ジャック・クイーン・キングと名付けたと伝えられる横浜最高のランドマーク。私は最も横浜

らしい三塔をモチーフにして横浜駅東口の玄関から人々を招き入れるゲートとなるガラスのモニュメントを作ることを提案しました。そして空間デザインには「かもめ」をたくさん飛ばしました。先行していた大手系を尻目に、コンペの結果は奇跡の圧勝。「世の中の美しい建築はガラス仕立て、今やガラスの安全性は保証済」とまで言っていただけました。

ただ、それからが大変。モニュメントの設計・制作・施工ひっくるめてその年の12月に納める、なんて気絶しそうなスケジュール。通常なら1年半は優にかかるところでしたが、なんせポルタ以外仕事がないので一点集中、三塔三昧、もう、神様仏様がお導きくださったとしか思えませんでした。それでも絶対的な時間不足、本来ならその都度了解や承認を重ねなければいけない大半を「私を信じてください」の一言ですべて端折って済ませ、ひたすら突貫で仕上げました。無事完成してもその実感すら持たなくて放心状態、ただ、経験したことがないほど多くの方に喜んでいただけてとても幸せでした。

このときからです。地震の多い日本では建築に関わるアーキテクチュアガラスアーティストが育ちにくいけれど、もっとこの分野が認知されるようにガラスアートの可能性を広げたい、若いアーティストの礎になりたい、と思うようになったのは。漸くトップホテルや海外の仕事なども少しずつ手掛かけられるようになってきていますが、いま私は、横浜を起点に、横浜でこそ一番良い仕事をして行こうと思っています。

そんな風に折り返しの10年が始まったばかりの新参者ですが、今後ともどうぞどうぞよろしくお願いいたします。

あっ、9の歳の他のゆかり、19で結婚して29で離婚して39で独立して・・・の行く立ちはまたいずれの折りにでも。



PORTA 横浜三塔物語 (右2点は、夜と昼のようす)

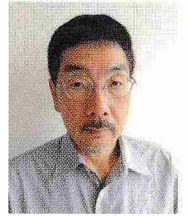


<http://www.mari-and-bird.jp>/<https://m.facebook.com/Atelier-Mari-and-Bird>

アーティストのコラボレートと展示空間について

美術家
B.T.A 代表
日本建築美術工芸協会会員

吉田 実



人間は分類が好きである。

どんな事象でも、有機、無機、事細かく分類する。分類は経済的であり合理的でもある。知識はその山頂にあるに違いない。

少々大袈裟な序文になってしまったが私自身は分類整理は苦手です。大学の文学部では田村隆一の詩に魅かれるが卒業は法学部、時のハズミで同時に専門学校のアトリエでは油絵の具で描いた過去は分類整理の夢ではありません。現代美術の幕開けとなるコンセプチュアル・アートの創始者であるマルセルデュシャンの作品『泉』はレディーメイド・既製品表現の発想に私はとても興味を持ち、昨年のBOX展において作品に市販のイヤホンを用いています。これは、覆いかぶさられて発する事のできない声なき声をひろうための手段としての表現であり、押し黙る声の象徴、引用として作品に用いたりしています。多量に生産されている工業製品、既製品、日用品を制作に取り込んでいくことができればと思案しています。現代社会は余りにも押し殺されて発することのできない声を表現の中にすくい取ることから遠ざかっているように私には感じられるのです。

現在、私は平面作品を新聞紙にパステルで描いています。平面作品に新聞紙を用いているのも、素材に耐久性がなく消耗品だからでもあります。また、それぞれの人の持っている日常と情報、マス・メディアを取り入れることができるのではないかとの思いからです。新聞に書かれている記事が目的であって、例えば、ある風景、ある物、形、色彩等を目指して描いている訳ではありません。紙面に記されている単語、文章、写真、CMのロゴ、広告などに反応、反射して色、線、面を描き、その色や線などに関係して同様の行為を連続的に行います。上下左右はなく360度回転させながら描き制作します。増殖し、行為が止まった時点で作品になります。作品の上下左右の判断は決めるべき人にまかせます。立体作品も形の積み重ねの連続行為に

より形になり、キットの積み重ねではありませんが組み上げることができなくなればその時点をもって作品になると同時に積み重ねられたもの、構造物、作品はいずれ崩れる、崩壊していく魅力に私は少なからず惹かれます。積み重ね、積み重ねることにより横たわる物が立ち上がり高みを目指す、その先には崩壊の幻が浮かび上がります。高みに対する古典的なイメージが付加されるのかもしれませんが、現代社会の経済優先の組織システムに忍び寄る予兆かもしれません。これからも現代社会の気配を感じさせる作品を制作し続けたいと思っています。

9月末に川越三番町ギャラリーにおいてBEYOND EX展を開催いたしました。この展示は美術表現が絵画(洋画、日本画)、彫刻、工芸等、更に日本文化の表現でもある書、生け花など、現在では平面・立体等による分類展示されることが美術館、ギャラリー(ホワイトキューブ)において当然のことにように扱われる状況に疑問を投げかけ、書・華・パステル画によるコラボレーション展示を試みました。

BEYONDEX展を主宰するB.T.A(BEYOND THE AREA)はこのような複合展示(インスタレーション)を試みたいと考えています。芸術美術の展示はホワイトキューブのみとは限りません。構造物の隙間、空き家、使用不可能な空間に各表現分野の作家が集い、コラボレートする、そのことにより新たな刺激を共有し個性的な発想が生まれるのです。そして、分類と同時に並列的調和を再生する必要があるように思います。

建築空間が合理的、快適空間デザインを創造するのみならずルーム、フロアの壁面、小さな空間、閉じ込められた空間、長く続く廊下の壁面、今迄顧みられなかった空間にアートが入り込むことで新たな発想の源泉になる可能性はいくらでも見出せると思います。もちろんそれには建築家ほかのアーティストとのコラボレートが必然です。

その機会の可能性こそが日本建築美術工芸協会の存在そのものであると思います。



川越三番町ギャラリーでのBEYOND EX 展会場



積み重ねの連続行為で形を作る立体作品



新聞紙にパステルで描いた平面作品

関係のひろがり

建築家
日本建築美術工芸協会会員 **山下博満**

日本設計は今年9月に創立50年を迎えました。創立以来、ひとつのプロジェクトにひとりの「担当技師」がついて全てをまとめるというやり方が今でも続いています。私が最初に担当技師を任されたプロジェクトは「岩手県立美術館」でした。1995年秋のデザインプロポーザルにはじまり2001年秋にオープンしました。その途中1996年にはもうひとつ「汐留B街区」を担当することになり、街区内部にある汐留シティセンターは監理まで担当し、2003年に竣工しました。前者は延床1万3千㎡(容積率62%)の隅々まで自分でコントロールできる公共建築、後者は街区全体延床22万6千㎡(容積率1,200%)のデザイン監修者と協働する民間開発で、これらふたつの対照的なプロジェクトが同時期に並行して進んでいたことで、超絶忙しいながらも様々な意味でバランスの取れた組み合わせでした。ふたつあることで自分の中で関係が生まれ、規模や役割が異なるからこそ、それぞれのプロジェクトの考え方に幅やひろがりが出てきたように思います。

汐留のプロジェクトでは、建築主側のプロジェクトマネージャーとして岡房信さん(現在 aaca 副会長)がいらっしゃいました。また、川瀬俊二さん(現在 aaca 専務)は当時「汐留A街区」の設計ご担当で、街区間の打合せなどでお会いしていました。そんなご縁もあって、今年から aaca の活動(景観シンポジウム)をお手伝いすることになったわけです。

汐留の後は大規模複雑系プロジェクトを担当することが多くなり、霞が関ビルを含む霞が関三丁目南地区(2000年開始、2009年春竣工)、札幌赤れんが庁舎前の札幌北2西4地区(2002年開始、2014年夏竣工)などが完成しています。これらの他にも大規模建築を含む複数案件が同時進行中だった2007年6月、基本設計を開始したばかりの他の設計チームからお施主さんと岩手県立美術館を見学したいとの連絡があり、月末の土曜日に案内しました。翌週の火曜日、当時社長だった六鹿正治(現

在 aaca 理事)に呼ばれたので行ってみると、件のお施主さんから緊急かつ強力な要請があったとのことで、なんと担当を山下に変えるというお達しでした。もう新たな仕事が入る余地はないという理性的な分析に、建築家冥利に尽きるありがたいお話だという本能的な勢いが勝って「山種美術館」を担当することになり、翌々日の木曜日には設計定例に参加、二年後の2009年夏に竣工しました。

恵比寿駅から駒沢通りの坂を上っていくと美術館が見えてきます。ところが展示室は地下にあり、2~6階は山種美術財団とは別の株式会社が所有する賃貸オフィスビルです。西日を遮るように配置した短冊状の花崗岩打込PC版が折り重なって、あれが美術館だ、と想像していただけのような見え方になっています。瞳孔を開くように明るさを抑えた風除室、オフィスと区切らずに広くとったロビー、地下へと誘う階段など、非日常の美術鑑賞にアプローチするシークエンスに工夫を凝らしました。展示室では余計な線を極力排除し、展示ケースの光源を見えない角度に配置するなど、作品に集中できるよう配慮しています。

このたび、冒頭の汐留プロジェクトで知り合った飯田郷介さん(現在 aaca 広報委員長)の呼びかけで、山種美術館の見学会が9月27日に開催されました。ちょうど高橋美奈子学芸部長によるギャラリートークの時間と重なったので、展示中であつた上村松園の世界を堪能いただけたことと思います。坪庭を望む応接室での山崎妙子館長とのご歓談も実現し、見学後には楽しい会話のランチにも参加させていただき、「美味しい美術館」を実感できたひとときでした。10年前に岩手県立美術館を案内さしあげた相手が山崎館長と高橋学芸部長でしたので、ご縁がひろがることのありがたさを改めて美味しく噛みしめることができました。

今後も aaca の活動をささやかながらお手伝いすることを通じて、さらなる関係をひろげてゆくことができれば望外の喜びです。



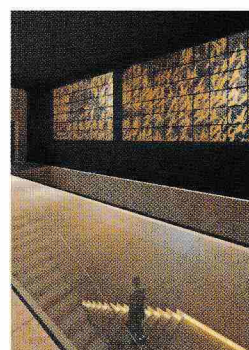
岩手県立美術館 外観



岩手県立美術館 内観



山種美術館 外観



山種美術館 内観

展覧会委員会だより

第3回街に飛び出す作品展：設置報告

街なかミュゼ活動実行委員長 安河内敦子

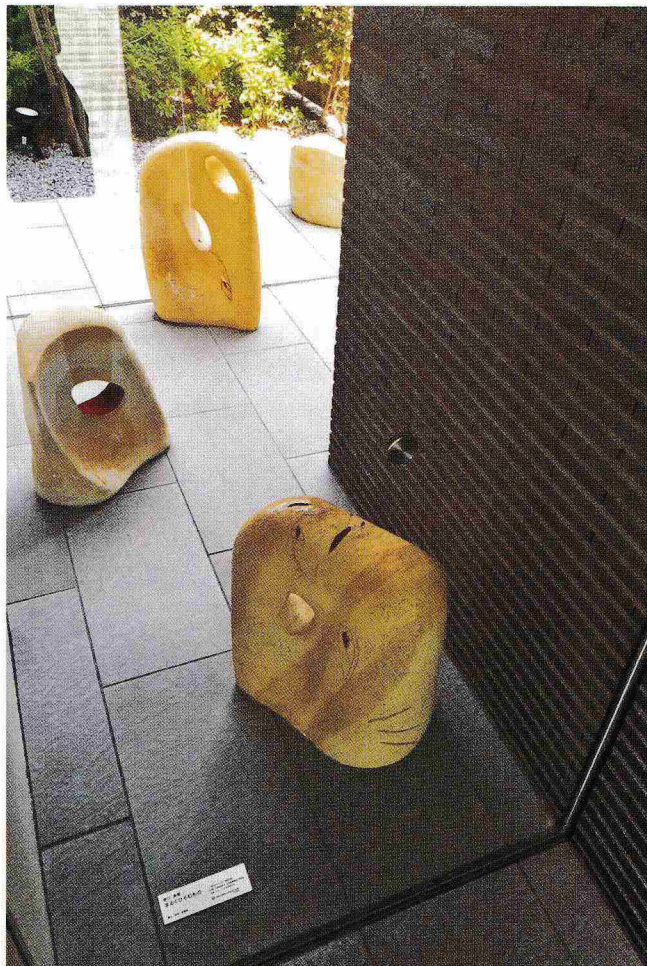
aacaはアート作品が街を豊かにする活動として「街なかミュゼ活動」を展開しています。建築の内部及び外部空間や街並みに芸術・工芸作品を設置し、環境美化、人間性豊かな空間創造を積極的に展開していこうとする活動です。毎年開催される「街に飛び出す作品展」に出品された作品の中から建物所有者に提供していただいたスペースを展覧会場に見立て、作家作品を1年間展示し「街なかミュゼ」と位置づけ展開しています。

「第3回街に飛び出す作品展」では、南烏山4丁目計画、玉川3丁目計画、池辺町免震マンション、アリア・ソワン

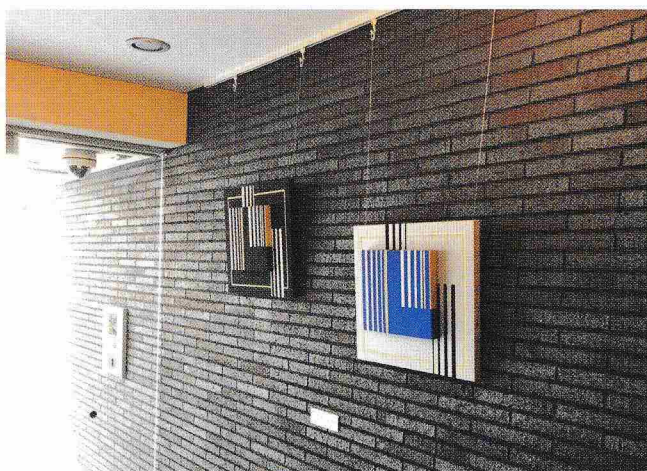
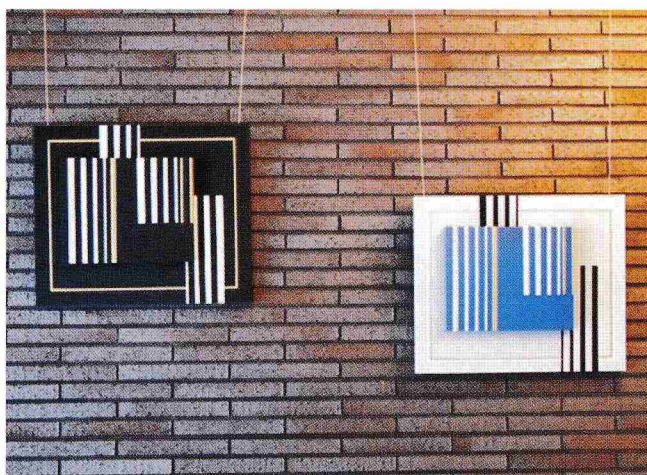
一之江、西瑞江5丁目計画のスタートCAM(株)が建設した5プロジェクトに35作品34名の応募がありました。

平成28年10月22～29日まで建築会館ギャラリーにて「第3回街に飛び出す作品展」として展示し、作家のプレゼンテーションを交えて、建物オーナー、スタートCAM(株)、aaca選考委員の三者で検討選考しました。それぞれ美的環境の創造と、各建物の住環境に調和し、また街並みに新鮮なメッセージを投げかける作品8点(7名)が選定され設置されました。

① 南烏山4丁目計画 (東京都世田谷区南烏山4丁目)



<サブエントランス> 野口真理 まるくひそむもの(陶土・粉漆・金属箔)



<エントランス>山崎和子 onTIME A・B(染織)

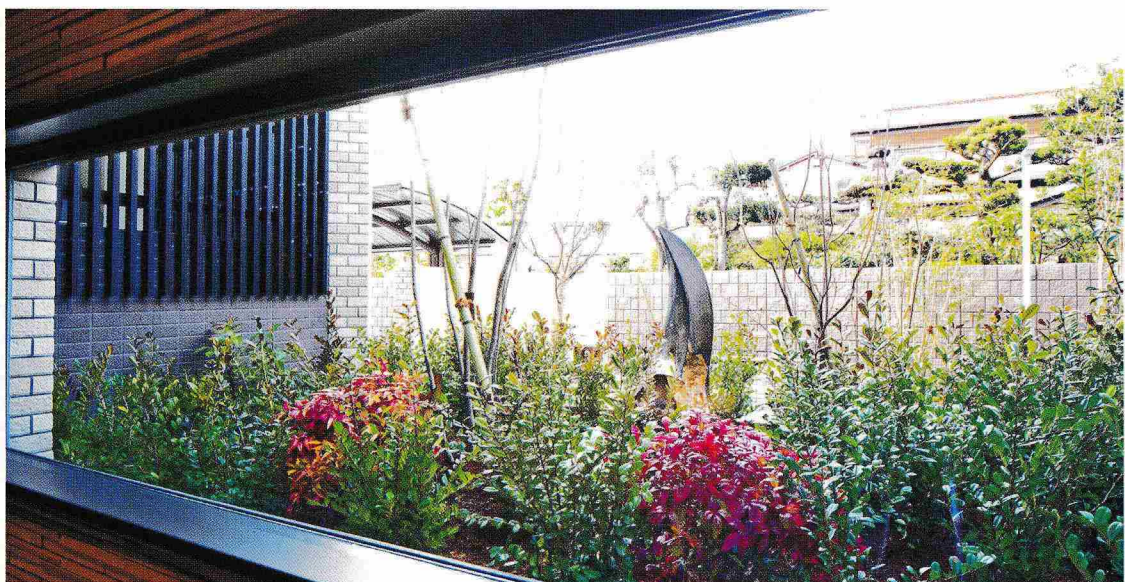
② 玉川3丁目計画 (東京都世田谷区玉川3丁目)



<エントランス外部> 鈴木 法明 やすらぎの詩 (チタン)



<エントランス> 神 まさこ Spiral 円 (木・錫)



<エレベーターホール外部> 神 まさこ Spiral (陶器)

●展覧会委員会からのお詫び

会報NO.75 街なかミュゼ活動 第3回街に飛び出す作品展は
第2回街に飛び出す作品展：設置報告の誤りでした。訂正いたします。

③池辺町免震マンション（神奈川県横浜市都筑区池辺町）



<エントランス> 井上 勝江 いやおいの風（和紙）



④西瑞江5丁目計画（東京都江戸川区西瑞江5丁目）



<エントランス外部> 堤 一彦 YUZURIHA（大理石）



⑤アリア・ソワナー之江（東京都江戸川区一之江3丁目）



<エントランス> 片岡 雅子 こだま（七宝）



展覧会から

第81回新制作展を通して



造形作家
日本大学生産工学部教授
日本建築美術工芸協会会員
二井 進

調査研究委員会の活動の一つとしてパブリック・プレイスとアートを継続的にテーマとして活動しています。

場所性というものを考えたときにアートが公共の場にどのように位置づけられるかは場に対する文化芸術活動を継続していく中で必要と考えています。

エコロジーとアート、地域での文化活動、歴史的・現代的視点、また環境に対しての有用不要を含めた考察。これらからアートと社会の関係性をどのように考えていくかはモノ、ハコ、コトを通して提案していく必要があると思

ます。

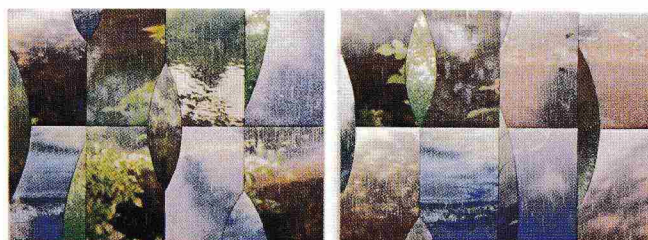
展覧会では特殊な空間での展示となりますが、アート作品が特別な存在として独立したものではなく日常生活の中の生活空間に普通に存在し、触れることも出来ます。

aaca 会員の作品も社会の、生活の場にあってどのように関わっていくのか様々な模索がなされているように思います。

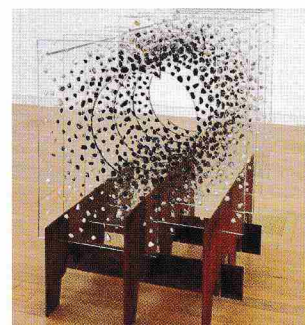
ここでは aaca 会員の方々の作品を会場風景と共に掲載させていただきました。



澄川喜一 そりのあるかたち 2017
(写真は図録写真より抜粋)



雨山智子 水の祈り 2017



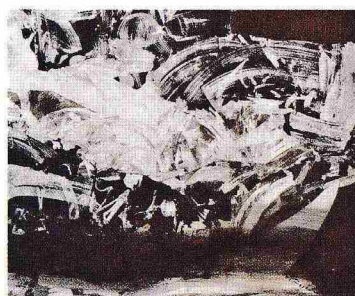
田中 遵 'Umikumaha 14



尾埜行男 (小野行雄) 花の日時計



野口真理 たねから土へ



置鮎早智枝 ル・ソングジュ1
(写真は図録写真より抜粋)



五十嵐通代 WALK IN THE SEA



二井 進 揺曳 (ヨウエイ)

■新入会員・会員の異動 2017年7月～2017年10月(敬称略)

2016年9月 個人情報保護法の改正が成立した事を受け、個人は氏名のみ、法人は会社名・代表者又は担当者を掲載致します。

《新入会員》

個人会員	青木恵美子(建築家)、堤 一彦(彫刻家)、和田順乃(モザイクアーティスト)		
法人会員	(株)フッコー	取締役副社長 杉山成明	〒151-0066 渋谷区西原 3-24-10 代々木上原 PDビル 3F TEL.03-5738-1771
	株式会社 エフワンエヌ	取締役支店長 喜多藤正樹	〒179-0076 練馬区土支田 4-6-8 TEL.03 - 5933-1400

《会員の異動》

個人会員	太田敏彦	住所変更	大阪市福島区吉野 5-8-19 (前 5-8-26)
法人会員	(株)安藤大理石	担当者変更	営業部 太田 勝 (前任 渡辺英徳)
	清水建設株	担当者変更	設計本部 企画管理部長 小島 哲 (前任 秋山 茂)

一 訃 報 一 心からお悔やみ申し上げます。



池原義郎 氏

元理事 5月20日逝去 1928年生 享年89歳 日本芸術院会員 早稲田大学名誉教授

日本建築美術工芸協会会員 (1991年11月～2011年3月)

理 事 995年～2001年

協会会報 第19号 (1995年8月) 新理事の抱負

作 品 "所沢聖地霊園礼拝堂・納骨堂、西武ライオンズ球場"

早稲田大学所沢キャンパス 他多数

受 賞 日本芸術院賞 「早稲田大学所沢キャンパス」

日本建築学会賞作品賞、

瑞宝中綬章



柳澤孝彦 氏

元理事 8月14日逝去 1935年生 享年82歳 柳澤孝彦+TAK 建築研究所代表取締役

日本建築美術工芸協会会員 (1988・6～2008・3)

理 事 1988年～2003年

協会会報 第4号 (1990年10月) 時代の華一輪のスタートに際し

第12号 (1996年9月) 対談 現代都市と文化 (猪熊弦一郎)

第14号 (1993年12月) 対談 現代都市と工芸 (大久保婦久子)

第21号 (1996年9月) 東京都現代美術館 他多数

寄 稿 地球市民と町づくり

作 品 第二国立劇場 郡山市立美術館 東京都現代美術館

真鶴町立中川一政美術館、奥田元宋・小由女美術館、他多数

受 賞 日本芸術院賞

郡山市立美術館及び一連の美術館・記念館の建築設計

編集後記

協会では広報委員会の組織に会報編集担当を設けました。

会報担当は会員有志のみなさんで編成され、記事の収集から編集・発送まで協力して運営されています。委員会に参加をご希望の会員の方はお申し出ください。会員企画・催し物の広告掲載も可能です。詳しくは、広報委員会・事務局にご相談ください。

aaca 2017.11 no.78

発行人 会長 岡本 賢

発行 一般社団法人 日本建築美術工芸協会

〒108-0014

東京都港区芝 5-26-20 建築会館 6階

TEL 03-3457-7998 FAX 03-3457-1598

URL <http://www.aacajp.com>

E-Mail info@aacajp.com

編集 広報委員会

委員長 飯田郷介

会報担当副委員長 野口真理

会報編集委員 五十嵐通代 石田真人 竹生田正

田島一宏 中村弘子 松本治子

山崎和子 山崎輝子 山下治子

編集制作協力 株式会社 アム・プロモーション